［年度］平成２０年度和歌山県農林水産総合技術センター研究成果情報

［成果情報名］ブランド化に向けた「田口早生」の収穫時期と果実品質

［要約］「田口早生」は「宮川早生」より安定して減酸が早く、11月初旬に収穫可能である。また、収穫時期を11月下旬以降とすることで糖度、果皮色とも向上し、より高品質な果実を収穫できる。11月下旬以降の収穫では浮き皮が発生しやすくなるが、セルバイン散布により軽減可能である。

［キーワード］ウンシュウミカン、田口早生、収穫時期、浮き皮

［担当機関名］果樹試験場・栽培部　　**［連絡先］**0737-52-4320

［部　会　名］果樹　　**［分　類］**普及

［背景・ねらい］

早生ウンシュウミカン「田口早生」は和歌山県オリジナルの品種として県の推奨品種に指定され、産地での導入が進められている。「田口早生」のブランド化を進めるためには、高品質果実生産とともにその特性を生かした収穫・出荷時期を設定する必要がある。そこで、収穫時期を早生ウンシュウミカンの収穫ピーク前である11月上旬とピーク後の12月上旬に設定し、果実品質等から収穫時期を検討する。

［成果の内容・特徴］

１．「田口早生」の果汁糖度の推移は「宮川早生」と同等である（データ略）が、減酸は早く、11月上旬には1%以下となり、食味が良好となり収穫可能となる（図１）。
２．12月上旬収穫の果実糖度は11月上旬収穫と比べて約1.8度高い（図２）。
３．12月上旬収穫の果実は11月上旬収穫と比較して、果皮の赤み(a値)が向上する（表１）
４．12月上旬収穫では浮き皮の発生が見られるが、収穫前３回のセルバイン散布により軽減できる（図３）。

［成果の活用面・留意点］

１．「田口早生」の収穫時期を11月初旬および11月下旬以降とすることで他の早生品種の収穫ピークを避けることができる。
２．本試験ではマルチ被覆を行っており、マルチ被覆を行わない場合は気象条件により糖度上昇が鈍くなることがあるのでマルチ被覆を行うことが望ましい。
３．12月上旬収穫において秋肥の施用時期が遅れた場合は、収穫後速やかに速効性肥料を施用するとともに、尿素500倍の葉面散布を１週間おきに3回程度実施し、樹勢の回復を図る。
４．11月下旬以降、成熟に伴い果梗部周辺に果皮障害（クラッキング）が見られることがあるのでその発生前に収穫する。
４．セルバインの使用にあたっては登録内容を遵守する。
５．浮き皮の発生程度およびセルバインの効果は気象条件により異なるので、園地の通気性改善などの耕種的な浮き皮対策を併用する。

［具体的データ］

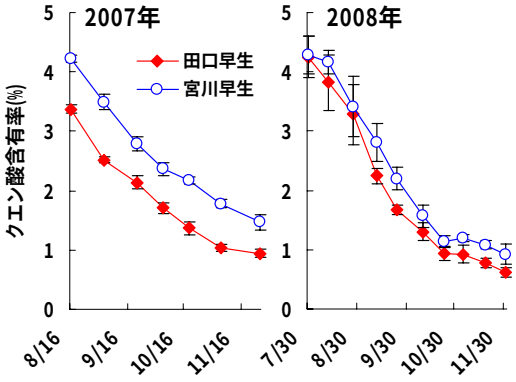

図１「田口早生」と「宮川早生」の
クエン酸含有率の推移

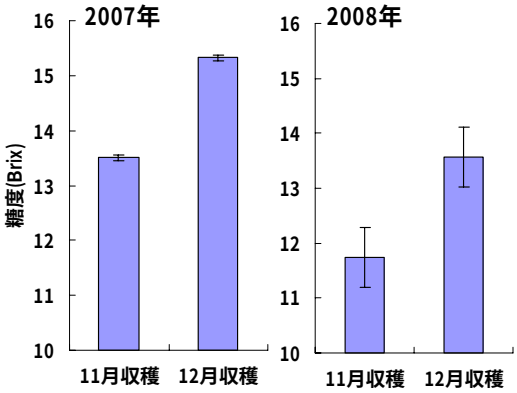

図２　収穫時期の違いによる糖度の差異
※収穫時にクボタ製フルーツセレクターにより2007年は全果実、2008年は1樹あたり40～50果(3樹反復)調査
収穫日：2007年11月8日、12月2日
2008年11月4日、12月1日

表１　収穫時の果実赤道部の果皮色

	収穫時期	a値
2007年	11月収穫	22.8
	12月収穫	27.7
2008年	11月収穫	17.3
	12月収穫	25.9

※果皮色a値は高いほど赤みが強い
収穫日：2007年11月8日、12月2日
2008年11月4日、12月1日

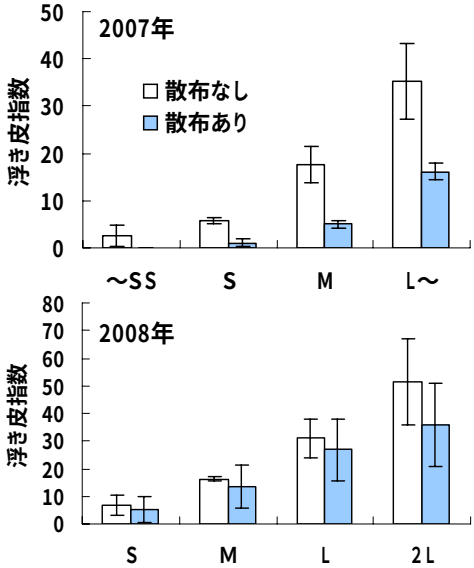

図３　セルバイン(300倍)散布の
有無による階級別浮き皮指数
※旧農水省果樹試興津支場編「カンキツの調査方法」(1987)に準拠し、収穫時に全果実を調査
散布日：2007年9月11日、10月12日、11月7日
2008年9月10日、10月9日、11月10日
収穫日：2007年12月2日
2008年12月1日

［その他］

研究課題名：和歌山ブランドみかん生産技術の確立
予算区分：県単　　研究期間：平成16～20年度
研究担当者：中谷章、鯨幸和、堀田宗幹、山本浩之、宮本久美
発表論文等：なし